

第一章 梅の縁起

第一章

梅の縁起

「初めまして、私はレイラ、アラビア語で夜の美しさという意味。LINEを交換してもいい？」

バスで一緒に来た乙女がサブリナの思考を遮って声をかけた。二人は話しながら運動場うんどうじやうへ向かった。一時間目の授業は体育で、体がまだ完全に目覚めておらず、機械的に皆に合わせて動いていた。

休憩時間になり、学生たちは校庭に座り、歴史を感じさせる

第一章 梅の縁起

校舎と砂埃が風と舞う運動場を眺めながら、残りわずかの高校生活に思いを馳せた。ウエンディが先に感慨を投げかけた。

「三年間ってあっといいう間だね。サブリナもあと一年ちよっとなんだ。最近どう？」

「前と一緒に、ひとりぼっちよ。友達がいればいいのになあ」

「えー、友達を作るのは簡単でしょ」

友達がいっぱいいる彼女にとって、その悩みは理解できず、問い掛け続けた。

「どうしたの？誰かと友達になりたいの？」

「まあ一応、あの子はどうかな？」

と言いながら、少女は手を伸ばして、運動場で汗を流しているスウェットシャツを着た乙女を指差した。

第一章 梅の縁起

「レイラ？彼女と仲良くなりたいの？」

「そうそう、レイラって言った気がする。明るくて大らかで友達ちがたくさんいそう」

「あの子は転入生だよ。転校してきたばかり。仲良くなりたいたら、声をかけてみたら？」

ウェンディは、相手がなかなか返事せずにいるのを見て、苛立ちながら励ました。

「いつからそんなに臆病になったの？転入生はさ、ちよっと恥づかしがり屋なはず。彼女から話しかけるのは相当、勇気がいるよ」

サブリナは考え込んでうなずき、何も返さなかった。

翌日の英語の授業で、早速、教室に入るなり、キラキラと輝

第一章 梅の縁起

く大きな目を発見して、

「やっほー」

と熱心に挨拶した。相手は頷いて返事をし、そのまま椅子に腰をおろし、スマホで遊び始めた。その時、彼女の袖を掴んで俯きながら立っている女の子に気づいた。

「一緒に座ろうよ」

と親しげに声をかけると、

「いやいやいや、ダメー」

と女の子は声を上げて驚いたように反応し、その激しい反応で一時的に空気が凍った。レイラは声を聞いて顔を上げ、慌てて立ち上がり、女の子の気分を和らげようとした。まず、サブ
リナに向けて、

第一章 梅の縁起

「二人で座りたいのかしら？ そうしたら、私、別の席を探すわ」
と言った。レイラはさっきまで、スマホに夢中で、状況について把握できていなかった。それでも、優しく女の子の手首を叩いて慰めた。女の子も自分の行動がどれほど馬鹿げていたか反省し、恥ずかしそうに唇を噛んだ。サブリナは数秒前、首をぶんぶん太鼓のように振っていた女の子のことを思い、困惑した表情を浮かべ、

「いいえ、大丈夫。ただ友達を作りたいだけ。二人でどうぞ。お邪魔しました」

と言って、教室の最後尾に座り、その怪しい会話を終わらせた。

「待って、どうして彼女たちを知らないの？」

エイヴリーが疑問を投げかけた。

「その頃はまだ新学期が始まったばかりで、たくさん新しい顔がいて、まだ見慣れていないから」

「それと、その女の子に、何か嫌われるようなことをしたの？」

「何も……あれは私たちが初めて関わった時だった。恐らく、レイラだけと一緒に座りたくて、反応しすぎたんだと思う」

「は？あたしだったらその場で喧嘩になるかも」

「私は怒らなかった。それにその女の子を責める気もなかった。

実はね、その週の金曜日、放課後にリュックを持って階段を降りようとしたら、またその子に会ったの」

少女は話しながら、再び思い出に浸った。

第一章 梅の縁起

その女の子はスマホをいじりながら、階段の入り口の側で、ずっと立っていた。ほどこいた髪は鎖骨までしか届かなかったが、顔のほとんどを隠していた。サブリナは英語の授業の気まぐさがまだ心に残っていて、その顔を覚えていた。

「ねえ、誰を待ってるの？」

と積極的に声をかけた。すると、女の子は茫然と顔を上げた。黒の大きなマスクで顔の大半を覆い、両目だけが残っている。しばらくして名前を出した。

「レイラー」

その答えに驚きはなかった、そして興味深く尋ねた。

第一章 梅の縁起

「彼女は、一番の友だちなの？」

「うんー！」

女の子は少しも躊躇せずに頷いた。

「レイラは本当に優しく、何度も助けてくれた私の恩人だよー！」

それを聞いて、サブリナは心の中で色んな感情が入り混じり、矛盾した気持ちになった。返事のように、または独り言かのよう

「わあ、羨ましいなー」

と一言残し、階段を降りた。女の子はその背中に向かって、軽く一礼をした。

「何笑っているの？ジャンナのこと好きなの？」

第一章 梅の縁起

「あの子は誰？誰が好きって言ったの？」

とサブリナは一瞬で笑顔を消して言った。声のする方向を見ると、校門の鉄柵てつさくの隣でモニカが待っていた。彼女たちはもう何年もの間の知り合いで、親友であるはずなのに、なぜか微妙な距離を保っていた。

「階段で見たよ。でもあんなに静かな子、どうやって仲良くなったの？」

「ああ、階段のところで人を待っていた子のことね。実は、私たちもちょうど知り合ったばかり。あの子を知ってるの？」

「あの子はジャンナで、音楽の授業で隣に座ってる。すごく謙虚けんきょで、フレンドリー。それにピアノを弾いている時は、本当に素敵で、まるで魔法みたいな旋律を奏でるんだ。うちはね、

第一章 梅の縁起

あの子のこと大好き。しかも、きれいだし」

サブリナはあまり気のりしない様子で、からか揶揄うように言った。

「女の子が好きなの？まさか君は……………」

「違うー！友達の好きだけって知ってるでしょ」

モニカはすぐにその戯言ざれごとを遮った。サブリナは微笑み、大きなコートをきつく体に巻いて歩き去った。すべては言葉にする必要がなかった。

家に帰って、目的もなくひたすらにスマホをいじっていた。最近の奇遇きぐうが頭の中で反響し、思わず口角が上がった。ジャンナの話で、心の中でレイラに好意が湧いてきて、また自分にはそんな親しい友達がいないことに感傷を覚えた。その時、ある写真が目に入った。写真の中で、レイラは背中を向けていて、

第一章 梅の縁起

神秘的な雰囲気が漂っていた。神の指示^{しじ}に従うかのように、サブリナは二人のチャットを開き、期待に満ちていくつかの挨拶のメッセージを送った。

それからの日々は平凡に過ぎていった。バレンタインデーになり、多くの生徒たちは、チョコレートを持ってきて、友だちと分け合っていた。昼食を食べながら時々教室の外に目が行く。突然、見覚えのある姿が目の前で点滅し、その瞬間、サブリナは立ち上がって追いかけた。レイラ^{れいら}だった。微風^{せいふう}が彼女の美しい髪を持ち上げ、まるで清麗^{せいれい}で寧静^{ねいせい}な深山幽谷^{しんざんゆうこく}に流れ落ちる滝のようだった。そのまま廊下の端まで追いかけた。初春^{しよしゅん}の太陽が人の少ない廊下に射し込み、外から数枚の紅梅^{こうばい}の花弁^{かべん}が舞

第一章 梅の縁起

い込む。そして、特別に用意したチヨコレートの箱を差し出した。実は、目の前の子に対して漠然ばくぜんとした好意を持ち、この梅花のように強靱きやうじんな美しさと艶やかなその人をもっと知りたいと思つた。

翌朝、二人は廊下ですれ違い、挨拶を交わした。

「あの転入生、ちょっと怖いね！なんか話しかけにくそう」

モニカが息を切らしながらやってきた。五階に登ってきたばかりのようだった。

「転入生？」

サブリナは一瞬誰のことを言っているのかがわからず、戸惑とまどいながら、疑問を投げかけた。

「レイラのこと？」

第一章 梅の縁起

「そうーあいつの目は大き過ぎて、いつも睨んでいるみたい。
うちのこと、好きじゃないような気がする」
その口調は、釘や鉄を切り裂くように、躊躇なく断固^{だんこ}として
いた。

「ん……そんなことないでしょ？ いい人だと思うよ」

「冷淡^{れいたん}な人に見えない？」

少女はその言葉を真に受けず、無関心そうに首を振り、その
訴^{うった}えには耳を貸さなかった。

「まあ、君はレイラを賞賛^{しょうさん}し、うちはジャンナが好き。それ
もいいわ」

話し終わって、気がつくともう教室の前にいた。そうして、
二人の間で話がついた。

第一章 梅の縁起

美術室に入ると、広い部屋には花の香りが満ちていた。真ん中には朝顔の絵があり、絵の中の雄蕊は薄い色合いで上品だったが、粘り強く蔓を這い上がって、強い生命力を示していた。サブリナは思わず尋ねた。

「モニカ、これ描いたの？朝顔好き？」

「うん、朝顔は人の手を借りずに、道路脇や石の隙間でも、次々育って、咲き乱れる。そのどんな困難にあっても諦めない精神が好きなの」

「でも朝顔ってね、一見、人畜無害だけど、実は全体に毒があるのよ。毎日頻繁に触れると、体にも心にも良くないわ」

ウェンディの冗談めかして言った言葉が、少女に絵を直視できなくさせ、何故かその雫のように繊細かつ華やかな花卉に背

第一章 梅の縁起

筋が凍るほどの情熱を感じた。

ある放課後、学校のバスで帰る途中、レイラは長い髪を後ろに束ね、ずっとスマホをいじっていた。サブリナは隣に座り、話しかけてみた。

「ねえ、あの……」

「あ、今、ゲームしてるから」

彼女は一瞥し、すぐにまたゲームに夢中になった。髪の毛が勢いよく少女の顔に当たった。数十分後、バスが家の前に停車しても、スマホを置かず、髪の毛が当たったことも謝らなかった。その瞬間、モニカの辛辣な評価が心に種を蒔いた。

バレンタインデーからちょうど一週間後の昼休み、ジャンナ

第一章 梅の縁起

はチヨコレートの箱を持って教室の入り口に立ち、サブリナが来るのを待っていた。マスクはしていなく、微笑んでいる。その笑顔には、冬の湖にちらりと太陽が光を落としたようなおぼろな臃おぼろげな優しさが浮かんでいた。

「チヨコレート、食べますか？どうぞ召し上がってください」と柔らかい口調で声を掛けた。サブリナは驚いて、じっと目前の子を見ながら、なぜ突然チヨコレートをくれるのだろうと考えていた。

「うんとね、友達からサブリナのチヨコレートを一つもらったから、返さなくちゃいけないと思って。たくさん取っていいですよ」

と相手はその迷いを感じ取りつつも、懇願するようこんがんに毅然と、

第一章 梅の縁起

しかし和らげな口調で言った。一つを取って口に入れ、チョコレートがゆっくりと溶けていく。甘さが緩やかに口の中で流れて、隅々まで包み込んでいった。それはチョコレートの甘さなのか、それとも待っていてくれた温もりなのか、サブリナは突然、違った感覚を覚えた。その女の子は小さな顔に絶妙な顔立ちで、一見すると美しいとは思えないが、見れば見るほど魅力を感じてくる。特に目立つ特徴がないからか、人混みの中では見過ごされやすい人だった。

さらに一日が過ぎ、天気はどんよりしていた。北風が吹き抜け、湿った冷気が骨まで凍て付くようだ。ジャンナはウェンディの隣に空虚くうきよな顔付きで座り、迷いの中に薄ら悲しみが隠れていた。その表情は、まるで職人が精巧せいこうに彫刻した芸術品の

第一章 梅の縁起

ように、冷^ひややかで人間離れしている。その子の周りにいると、時の流れる足取りも遅くなる気がする。サブリナは彼女に近づき、リュックにある桜の刺繍が目に入って、やっと気がついた。一日前にチヨコレートをくれたこの子は、あの、まさに蝶々さえも魅了する女の子だ。しばらく側で観察した後、声をかけた。「ハーイ、チヨコ美味しかったよ。あつ、お話、邪魔しちゃった?」

「いいえ、私たちは話してないわ」
と女の子は言いながら手を振り、顔を上げて心配そうに尋ねた。

「どっか、具合^{ぐあい}悪いの? 顔色少し悪いですね」

(1) 空虚 心のよりどころが、何もないこと。

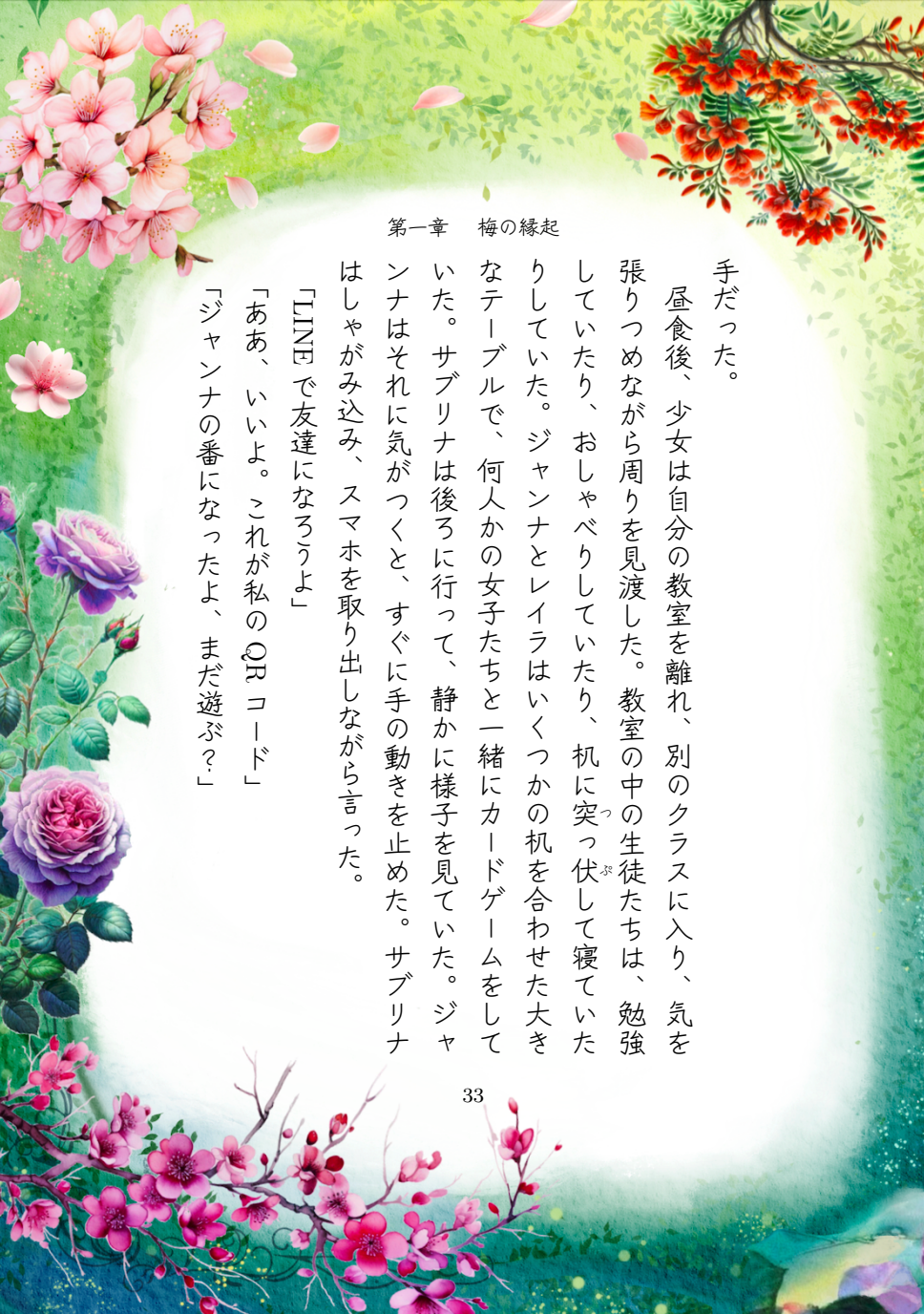
第一章 梅の縁起

「あつ、大丈夫、たぶん一日ずっと授業を受けたから、疲れたのかも」

朝に二つのテストがあり、顔は確かにやつれて、血色けつしよくが悪く、ファンデーションを塗ったことで頬が青白くぼくなっている。だが、その突然の気遣いに多少意外に感じた。普段、誰もこんなことに気を配ってくれないはず。

「大変でしたね、無理しないでくださいね」

と相手は軽くとんとんと少女の肩を数回たたき、慰めた。普段、肉体的な接触を好まない彼女だが、この時は嫌な気がしなかった。ゆっくりと頭を下げ、視線は相手の引つ込めた手に留まった。その手は、長い爪も、余計な装飾もない。指は細くて、長い、さっぱりして気品がある。ピアノを弾くのにぴったりの



手だった。

昼食後、少女は自分の教室を離れ、別のクラスに入り、気を張りつめながら周りを見渡した。教室の中の生徒たちは、勉強していたり、おしゃべりしていたり、机に突っ伏^ぶして寝ていたりしていた。ジャンナとレイラはいくつかの机を合わせた大きなテーブルで、何人かの女子たちと一緒にカードゲームをしていた。サブリナは後ろに行って、静かに様子を見ていた。ジャンナはそれに気がつくのと、すぐに手の動きを止めた。サブリナはしゃがみ込み、スマホを取り出しながら言った。

「LINEで友達になろうよ」

「ああ、いいよ。これが私のQRコード」

「ジャンナの番になったよ、まだ遊ぶ？」

第一章 梅の縁起

とレイラは温かい声で注意を促した。

「え？あ、ちよっと待って」

その間に、少女は友達リクエストを送ったから、

「リクエスト送ったよ。後で見といてね」

と伝えた。女の子は、すぐにスマホを手にして友達追加をし、投稿画面をチェックし始めた。しばらくするとウエンディが駆け寄ってきて、彼女の首に抱きつき、甘えっ子のようにせつかに言い放った。

「ジャンナちゃん、ゲームやるの？誰のせいで、こんなに気を散らされているのかしら」

この言葉に隠れている追い出す意味を掴み取ったサブリナは立ち去ろうとした。すると隣に座っていた女の子がその手を握

第一章 梅の縁起

り、眉毛を^{しか}顰め、目を凝らして周りを見ながら手を軽くたたいた。言葉はなかったが、ここにいて欲しいという気持ちには伝わり、いたるところに暖かさが溢れていた。

放課後、階段の角^{すみ}で、午後の太陽がジャンナの髪の毛の縁を金色に照らしていた。サブリナが近づくと、行く手^{ゆくて}を塞^{ふさ}ぎ、二人は手のひらを叩き合った。ジャンナは、

「また「^ニ」で連絡するよ。帰り道は気をつけてね」

と耳元で囁^{ささや}いた。少女は疲れた目をゆっくりと上げて、軽く頷きを返した。何か言おうとした時、レイラが後ろから現れ、ジャンナの手を取って階段を降りて行った。女の子は顔を振り向いて手を振り、バイバイした。そのひと目は心に波紋を起こした。

第一章 梅の縁起

放課後、サブリナは直接家に帰らず、学校の近くの川沿いを散歩した。橋の側の梅の木は、最も美しく咲き誇る時期を過ぎていて、風で花弁がいくつか落ちていた。しかし、それらは生命の終わりを知りながらも、風に散ることなく、一つ一つ丸ごと地面に漂っていく。寒さの中でも誇り高く咲かせる姿に感嘆せざるを得なかった。橋の上から見る景色はまだ冬の痕跡が残っていた。桜の木はまだ枯れ枝で、数本の細い枝が凜然と空に向かって伸びており、まるで灰白^{はのぐら}いキャンバスに映る黒い輪郭線のようなだった。微風が彼女の頬を撫で、梅の香りを運んできた。川面の氷には鏡のように自分の姿が映っていた。その瞬間、彼女は漠然と感じた。心の奥で何かが目覚め、動き出そうとしていることを。